

## 研究室を後に

春日, 和男  
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/16308>

---

出版情報 : 文献探究. 2, pp.1-2, 1978-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

## 研究室を後に

春日和男

自分の研究室にある書物をそぞくささとりまとめて、九丈ともお別れということになった今、心中を去来する感懐は複雑であつて、正直なところ何から述べてよいか、ましまりかつかない。ガランとなつた旧い個室にとり残された虫喰い本の始末などを考えていると、にわかには淋しさが襲いかかつて、思わず胸に迫るものを感じる。

私が永い間お世話になつた国語学国文学の研究室について思うことは、やはり、かけがえのない五十余年の歴史に培われていたという事実であつて、しかも、その性格が次第に変りつつあるということである。私が当文学部に赴任した当初は、旧館へ現在の生産研。理工系キャンパスの時代で、その一角に国史と同居の研究室兼書庫があつた。その面影は、現在の書庫の配置にも残されているが、当時は、雑誌のバックナンバーを始め、基本図書の種類がよく整備されていることで、

自他共に許した一特色ともなつていた。こういうと、研究心旺盛な諸君の中には「何だ、基本図書か」と一笑に付する向きもあるうが、その基本図書の中には、戦後の大学が四苦八苦して集めても、到底入手できない種類のものが多いのであつた。あだやおろそかにできないのである。

もしそれ、付属図書館蔵の関係書籍をもつて補うならば、私共は身近に空庫を懐いているようなものであつて、まことに恵まれた環境にあること今更いうまでもない。この間も、大阪の小島吉雄先生先生から、萩野文庫にある「東洋学会雑誌」第二編の中の詩歌に関する論文調査の御依頼を受け、早速コピーして差し上げたが、このような明治中葉の刊行誌も、中央においてさえ見るのが容易でないこととが判り、有難さひとしおであつた。物価高騰のあおりで、今日の研究室では、その基本図書の購入などは、目をつぶらねばならぬ場

合が多いことを思うとき、なおさらである。

ただ、一方では九大本というような資料的価値の高い文献が世に顕われつつあることも事実である。私はこの数年來、大学院の国語学演習に「国語資料の研究」というテーマで、九大所蔵本をしばしばとりあげてきた。特に説話の文体では、九大本の「宇治拾遺物語・今昔物語集」さては「宝物集」などを用いる便宜を得たが、思い出しの最たるものは、戦後に蒐めた訓点資料を实地に使用できたことである。この中には、石山寺旧蔵「瑜伽師地論平安初期点」のごとく、奈良朝写経に白点を加えた一巻などがあって、恐らく九大全蔵書目の中の最古の部類に属するものと思われる。但し、教室では手頃な移点本の儀軌類を一冊ずつ学生諸君に貸与して、その点法や仮名、語彙や語法の調査をして貰った。いわば、なまの現物について、直接調査をする文字通りの演習であった。これは、私にとっても、大変な勉強になり、有意義であったと思つてゐる。その詳細は、それぞれの研究成果をまとめ、いづれ何等かの形で発表したい。

今、空の書棚に囲まれた、旧自室に独り腰

を下して、来し方を瞑想していると、やはり書物のない部屋は魂の抜けたようなもので、何ともいたたまれない。その一隅に先日崎村君がとりまとめ届けてくれた前記演習用儀軌類だけが十数冊積んである。今日は、これらを貴重書庫に返却して、自分もいよいよこの部屋を後にせねばならない。

本当に永らくお世話になりました。

※春日先生は、九州大学において永年国語学を講じられ、われわれも幾度か先生の講筵に侍することを許されたのであったが、いつしか年月が流れ、本年三月、先生御退官の日を迎えることとなった。先生は、御忙しい中、快く求めに応じて右の御言葉を下されたのである。編集部一同、先生の御学恩に対し深く感謝申し上げるとともに、ますます御元気に御活躍下さることを御祈りする次第である。永り間、本当に有難うございました。

(編集部記)